

どれだけの時が過ぎようとも、
変わらない大切なものがある。

生命の神秘と大樹の声

桜一色の春がかけぬけると、若々しい緑と色彩豊かな花々が見ごろを迎えます。定禅寺では、風にほころぶ紫が美しく浮かび上がり、新緑とツツジの紅白が鮮やかに彩りを添え、初夏の訪れを知らせます。

住職の長男でこの春、京都府の大学を卒業する大庭達空さん。藤祭りでは幼少のころから祖父と先導役の父の前を歩きました。これまで開花に合わせて帰省しましたが、4月から久留米市の浄土宗大本山善導寺に入山のため、今年は生まれて初めて、藤の花が見られないかもしれません。「花に会えないのは、心に穴が空いたような気にもなりますが、お寺やこの町をずっと見守ってくれたこの藤に恥じぬよう、努力と修行を重ねたいと思います。この寺はだれもを歓迎する心あらわれる場であってほしいし、自分が守られてきた以

上に、この藤を大切に守っていききたい」と祖父や父の衣鉢（いぼつ）を継ぐ意志を語りました。

周囲から「老木」と心配される声を聞く中で、迎接の藤が根つたいに本堂の裏で花を咲かせている姿を見て、達空さんはその生命力と力強さに目を見張りました。そして「この藤は皮一枚でも伸びて花をつけるんだよ」とほほ笑んだ在りし日の祖父と、その優しいまなざしを思い浮かべました。

50年以上の時を経ても失われない、ため息が出るほどの美しさ。静かに佇む太い幹は、生命の美しさと強さを訴えかけます。藤守の手に応えて咲き、人々に安らぎや希望を与えてきた迎接の藤。近年は炭鉱の盛衰や財政再建、そして、新しい町の誕生を見届けてきました。そんな町花「藤」の象徴的存在である大樹は、今の世に何を思い、故郷に何を投げかけるのでしょうか。ただ風に揺れるだけの花、一本の樹が教えてくれることがあります。それは、かけ



右は迎接の藤を供養する先代の大庭達城住職、中央は幼いころの大場成美住職、およそ50年前の「藤祭り」の風景。



「この藤もお酒が好きだから」と、自家製のどぶろくの上澄みを藤にあげていたという前住職。迎接の藤をこよなく愛した父に代わり、今は成美住職がその意を継いでお酒をそそぐ。遠くから喜ぶ声が聞こえてきそうな藤供養の瞬間。



かつて父が祖父を先導したように、藤祭りで大役を果たす大庭達空さん②。昨年は陽春に恵まれ、境内に甘い香りが広がった。

歓迎

心意の継承 伝

大切なものほどさりげなく、ずっと変わらずそばにある…。ただそこに咲いて迎える藤が私達に語りかける声に耳を傾けた。



大庭 達空さん

祖父と父の意志を継ぎ修行を重ねる



迎接の藤の開花は約2週間。以前のピークは「子どもの日」だったが、今は温暖化の影響で4月下旬に見頃を迎える。例年「藤祭り」を4月29日の11時から挙行。

がえのないものを守る心であり、美しさに心動かせる感動であったり、客観的にこの町や自分を見つめることでもあります。

藤の花言葉は「歓迎」。咲き誇る迎接の藤は、文字どおり観る人を飲んで迎えてくれているかのようです。迎接の物語に触れて観る今年の藤は、また一段と違って、あなたの目に映ることでしょう。